

世帯の社会的脆弱性に着目した 住民の孤立予防・軽減に関する研究

福定正城 日本福祉大学大学院博士課程
日本福祉大学健康社会研究センター
国立長寿医療研究センター
医療法人東ヶ丘クリニック

- 「8050」と呼ばれる世帯
 - 困窮、孤立など課題が複雑化・多様化
 - 世帯が地域で生活するためには、包括的な支援体制が必要（厚生労働省2020）
- 支援者
 - 支援者間で合意形成をしにくく、かつ、支援効果を測定・共有できていない



世帯の社会的脆弱性構造 解明の試み（福定2021）
→ 構造の中核は世帯としての社会的孤立にあると示唆

世帯の社会的脆弱性尺度 を開発（福定ら2021）
→ 3因子（社会的孤立・セルフネグレクト・社会的不適応）
19項目

「世帯の社会的脆弱性」とは何か

- 世帯境界の固さによって、支援を受け入れにくいと同時に自ら支援を望まず、社会生活上の脅威にさらされた場合に被害を受けやすい状態

図 世帯の社会的脆弱性のレベル

世帯の社会的脆弱性

高

1. 外部との
つながり・支援を
一切拒否する世帯

目的①
調査1, 2

2. 外部とのつながり・
支援の大部分を
拒否する世帯

目的②
調査3, 4
ハイリスク・
アプローチ

3. 外部とのつながり・支援を拒否しがちな世帯

4. 外部とのつながり・支援をほどよく取捨選択できる世帯

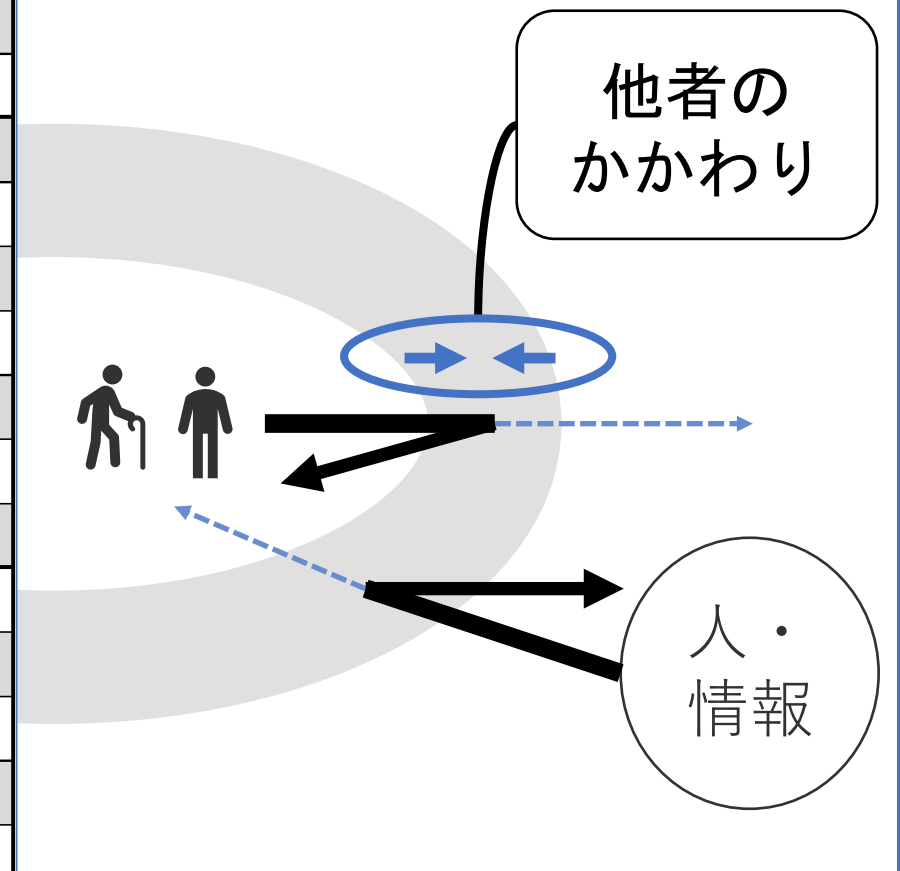
低

目的③
調査5, 6
ポピュレーション・
アプローチ

世帯の社会的脆弱性尺度とは何か

セルフ・ネグレクト	1. 自宅が不衛生である
	2. 偏った食生活をしている
	3. 指示通りの服薬をしてしない
	4. 将来の見通しが立てられない
	5. モノに依存している（酒やタバコなど）
	6. 経済的に不安を抱えている
	7. 認知機能が低下している
社会的不適応	8. おかれた境遇に引け目を感じている
	9. 精神的に追いこまれやすい
	10. 世帯員との接し方がわからない
	11. 世帯内でいさかいが発生している
	12. 将来に対してなげやりな気持ちがある
	13. ひきこもり・閉じこもりが長期化している
	14. 人の集まる場所に出掛けたくない
社会的孤立	15. 世帯の外に頼れる人がいない
	16. 親族と疎遠である
	17. 訪ねてくる人がいない
	18. 困った時に助けを求める方法がわからない
	19. 他人が家に入ることに抵抗感がある

- ・ 介入前後測定
 - ・ 支援効果測定・共有
 - ・ 支援者間の共通理解



目的・方法



・目的

- ① 支援者を対象にしたアセスメントスキル習得のための世帯の社会的脆弱性に関する研修プログラムを開発・試行し、有用性を検討すること
- ② 世帯の子を対象にした世帯の社会的脆弱性軽減のためのプログラムを開発・試行し、有用性を検討すること
- ③ 一般高齢者を対象にした孤立予防・軽減のためのオンライン・プログラムを開発・試行し、有用性を検討すること

・方法

倫理的配慮：日本福祉大学大学院倫理審査委員会(21-014、2021年6月10日承認)

目的	調査	調査時期	調査方法	対象者(人数)
①	1	2021年8～10月	インタビュー・質問紙	専門・行政機関職員(29名)
	2	2022年5～6月	インタビュー・質問紙	専門・行政機関職員(19名)
②	3	2022年9～10月	インタビュー	高齢者と子世帯の世帯員(3名)
	4	2023年1～5月	参与観察	高齢者と子世帯の子(4名)
③	5	2021年11月	質問紙	阿久比町在住高齢者(34名)
	6	2021年3～5月	インタビュー・質問紙	阿久比町在住高齢者(10名)

目的①

支援者を対象にした世帯の社会的脆弱性に関する
アセスメントスキル習得のための
研修プログラム開発と有用性の検討

目的①調査1：支援者の研修ニーズ



質問紙

- ・ **対象者**
 - ・ 29名（7つの専門機関・1つの行政機関に従事する職員）
 - ・ 無記名自記式調査（回収率100%）
- ・ **主要な質問項目**
 - ・ 性別・経験年数等の属性、支援困難感、獲得している知識・スキル等
- ・ **分析方法**
 - ・ 各項目への回答分布を確認

個別インタビュー

- ・ **対象者**
 - ・ 7名（縁故法）
- ・ **主要な質問項目**
 - ・ 世帯への支援に関して、どのような課題を感じていますか
 - ・ どのような内容の研修であれば、支援に役立つと思いますか等
- ・ **分析方法**
 - ・ 研修ニーズに関する語りの部分を意味のあるまとまりで分類

研修ニーズ

- ・ 大半は体系的な知識獲得の重要性を認識
- ・ 支援効果が実感・共有できない
- ・ 支援者間で共通理解を得られない
- ・ 身近な事例を知りたい
- ・ 支援に役立つ社会資源が分からない
- ・ グループワークは不全感が残る
- ・ 安全な場で質問をしたい
- ・ 楽しくわかりやすくあって欲しい

目的①調査1：研修プログラム開発



研修ニーズおよび経験学習理論に基づきプログラムをデザイン

目標：高齢者と子世帯へのアセスメントスキルの習得と支援者間の共通理解の促進

第1回

第2回

第3回

第4回

テーマ 高齢者と子世帯にかかわる概念整理 高齢者と子世帯へのアセスメント方法 高齢者と子世帯へのアセスメントの実際 高齢者と子世帯に関わる社会資源の実際

事前動画

ガイダンス
①社会的孤立
②セルフ・ネグレクト

①高齢者と子世帯をめぐる背景・実態
②世帯の社会的脆弱性および尺度使用方法

①高齢者と子世帯へのアセスメントの実際

①高齢者と子世帯に関わる社会資源の実際

質問

Slido（匿名で質問可能なプラットフォーム）で受付

事前動画まとめ・質問への回答(10分)

演習(70分)

集合研修
90分/回

ミッション：社会的孤立者を10%削減せよ

クイズ大会：クイズ
ちようどええ

てさぐり先生特別授業

既成年の主張

Googleスプレッドシートを用いた振り返り・学びの共有(10分)

反転授業を応用

- ・対話式
- ・15分以内/本
- ・楽しく理解する

ゲーミフィケーションの考え方を活用
例：大賞決定・クイズ等

共通理解促進のため、支援者間での学びの共有

「安全な場で質問をしたい」ニーズに対応

目的①調査2：研修プログラム試行方法



・ 開催時期

- ・ 2022年2月～5月（月1回開催）

・ 参加者

- ・ 19名（阿久比町内地域包括支援センター職員、行政職員、介護支援専門員、相談支援専門員、民生委員、コミュニティソーシャルワーカー）

・ 調査、分析方法

- ・ 質問紙調査（実施前後・各回終了後）
 - 回答分布を確認し、項目により検定を実施
- ・ 個別インタビュー調査（実施後）
 - プログラムの評価・効果に関する語りの部分を意味のあるまとまりで分類

目的①調査2：研修プログラム試行結果



質問紙

- ・満足度・目標達成度
 - ・すべての回で、参加者の殆どがいずれの項目にも肯定的な評価
- ・前後比較
 - ・自己効力感向上
 - ・支援者間の共通理解促進
 - ・役立ち感・支援者間親和性向上

個別インタビュー

- ・参加者は、研修プログラムを楽しく、理解しやすい【心理的に安全な学びの場】だと認識していた。そのうえで、世帯の社会的脆弱性の「見える化」と言語化、および、参加者同士の自己開示を含む集合研修によって、アセスメントスキルが習得され【無力さからの解放と支援体制の構築】の好循環が生じ、＜自身の経験を踏まえたリフレクション・概念化＞から＜今後の実践に向けた意識・行動の修正＞へと【経験学習サイクルの促進】がなされていた。

- ・世帯へのアセスメントスキル習得と支援者間の共通理解促進により、世帯への支援に関する自己効力感が向上し、エンパワメントにつながることが示唆

目的②

世帯の子を対象にした
世帯の社会的脆弱性軽減のための
選択式プログラム開発と有用性の検討

目的②調査3：高齢者と子世帯のニーズ



先行研究調査

- ・ 文献
 - ・ 福定(2021)『ソーシャルワーク研究』46(4), 47-55.
 - ・ 福定ら(2021)『厚生指標』68(12), 27-33.
- ・ 分析方法
 - ・ 支援者の視点による世帯のニーズを抽出

インタビュー調査

- ・ 対象者
 - ・ 3名(現在およびかつての高齢者と子世帯の世帯員)
- ・ 主要な質問項目
 - ・ 現在はどのような困りごとがありますか等
- ・ 分析方法
 - ・ 世帯のニーズに関する語りの部分を意味のあるまとまりで分類

高齢者と子世帯のニーズ

- ・ 世帯の状況を否定されたくない
- ・ 許した領域までしか踏み込まないで欲しい
- ・ 金銭的な不安を軽減したい
- ・ 健康・介護に関する知識を得ていない
- ・ 助けてがうまく言えない
- ・ 無秩序に管理される健康
- ・ 経済的な見通しへの漠然とした不安

目的②調査3：選択式プログラム開発



世帯のニーズおよび家族システム理論に基づきデザイン

タブレット端末を用い、参加者と支援者が相談し①～⑥からテーマを選択

目標：世帯の社会的脆弱性の軽減

テーマ(担当)

実施内容

時間

①薬(薬剤師)

薬の基礎知識について学ぶ

30分

②認知症(医師)

認知症予防について学ぶ

30分

③栄養(管理栄養士)

栄養について学び食生活を振り返る

30分

④社会的孤立(研究者)

社会的孤立について学ぶ

30分

⑤運動(理学療法士)

生活に運動を取り入れる

30分

⑥家計相談(ファイナンシャルプランナー)

1. 家計相談内容の準備

30分

2. ファイナンシャルプランナーとの家計相談

60分

3. バランスシートによる今後の検討

30分

講座
視聴

相談

「世帯の状況を否定されたくない」「許した領域までしか踏み込まないで欲しい」ニーズに基づき、各回終了後グループLINEに感想を投稿

目的②調査4：選択式プログラム試行方法



・対象者

- ・4名（世帯の子）

・調査、分析方法

- ・世帯の社会的脆弱性尺度 → 尺度得点を算出
- ・参与観察（個別インタビュー・フィールドノート）
→特徴的な場面を抽出し経過をまとめた

・参加者と選択プログラム

事例	性別	年齢	婚姻	世帯構成	経済状況	選択プログラム
A	男性	70-74	未婚	独居 (かつて高齢者と子)	やや きびしい	⑥
B	女性	60-65	未婚	高齢者と子	やや きびしい	②③⑤
C	女性	65-70	未婚	高齢者と子	ふつう	①②③④⑤
D	男性	65-70	未婚	高齢者と子	ふつう	①③④

脱落者1名

理由：タブレット使用の困難さ

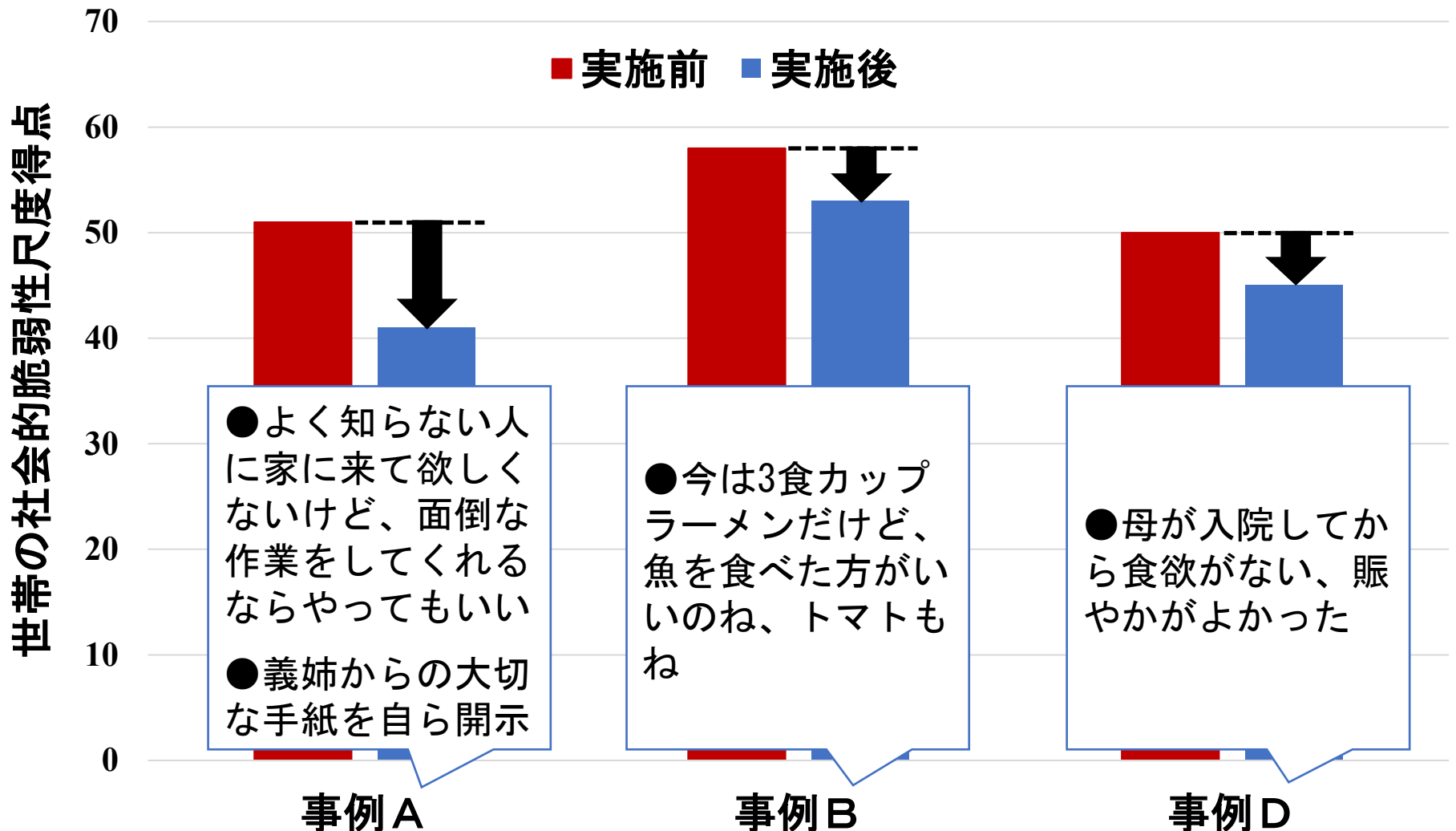
※参考 講座視聴 ①薬 ②認知症 ③栄養 ④社会的孤立 ⑤運動

相談 ⑥家計相談

目的②調査4：選択式プログラム試行結果



参加世帯における世帯の社会的脆弱性が軽減



目的③

一般高齢者を対象にした孤立予防・軽減のための
オンライン・プログラム開発と有用性の検討

目的③調査5：高齢者へのニーズ調査



質問紙調査

- ・ **対象者**
 - ・ 34名（阿久比町在住高齢者）
 - ・ オンライン調査
- ・ **主要な質問項目**
 - ・ 性別・年齢等の属性、プログラムに対するニーズ等
- ・ **分析方法**
 - ・ 各項目への回答分布を確認



・ 回答者の属性

- ・ 男性76.5%、前期高齢者85.3%、
対面交流頻度週1回未満29.4%

・ プログラムへのニーズ

- ・ 「健康教育」61.8%、「体操教室」「交流会」約4割



自治体、地域包括支援センター、社会福祉協議会、研究センターで協議

目的③調査5：オンライン・プログラム開発



「健康教育」ニーズに基づきテーマを設定

「体操教室」ニーズに基づき設定

目標：健康に関する総合的な知識の向上、健康づくりへのモチベーション向上、地域での社会関係の構築

	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回
日付	2022年3月16日	2022年3月30日	2022年4月13日	2022年4月27日	2022年5月11日
テーマ	薬の基礎知識を学びましょう！	認知症を予防しましょう！	食生活を振り返りましょう！	社会的孤立とその影響を学びましょう！	生活に運動を取り入れましょう！（実技あり）
13:30	ガイダンス	—	—	—	—
14:00	講義 ：薬剤師	講義 ：医師	講義 ：管理栄養士	講義 ：研究者	講義 ：理学療法士
14:30 — 15:30	ほめられる ワールドカフェ ：誰もが薬の量・回数を守る方法は？	ほめられる ワールドカフェ ：認知症予防のために明日からまず何を行いますか？	ほめられる ワールドカフェ ：毎日の食事で7点以上を目指すためにできることは？	ほめられる ワールドカフェ ：阿久比町の孤立者を減らすアイデアを教えてください	ほめられる ワールドカフェ ：どうしたら運動を継続できるでしょうか？

各回講師が立てた「問い」を参加者が答えると同時に、肯定的なフィードバックを得て交流する設定

目的③調査6：オンライン・プログラム試行方法



・開催時期

- ・ 2022年3月～5月（2週間に1回）

・調査、分析方法

- ・ 質問紙調査（実施前後・各回終了後）
→ 回答分布を確認し、項目により検定を実施
- ・ 個別インタビュー調査（実施後）
→ プログラムの評価・効果に関する語りの部分を意味のあるまとまりで分類

・参加者

- ・ 10名（男：女＝6：4、阿久比町在住高齢者）
 - ・ 平均年齢 75.5±3.6歳
 - ・ 参加回数 全5回7人（70%）、4回3人（30%）
 - ・ 欠席理由 忘れていた、体調不良、予定の重なり

目的③調査6：オンライン・プログラム試行結果



質問紙

- 満足度・目標達成度
 - 興味、満足度、役立ち感、健康に関する知識、健康づくりへのモチベーション向上
 - 健康教育への評価良好
 - 参加者間の交流に課題
- 前後比較
 - 抑うつ改善 ($p < .05$)
 - 健康度自己評価向上

個別インタビュー

- 講義でく得られた知識による日常生活の確認をくおこない、他の参加者の工夫に触れてく健康づくりに対する前向きな気持ちとく他者との関わりによる共同体感覚をく獲得していた。【今後のオンライン交流の場づくりへの提言】として、オンライン特性を踏まえたく交流の場における工夫の必要性がく認識され、スムーズな運営のためのくネットワークトラブル対応への課題をく解消とく勉強会による情報格差縮小の必要性がく語られた。

- いくつかの改善点はあるものの、プログラムの一定の有効性が示唆
- 地縁・志縁に基づく多様なオンライン交流の場の設立により、高齢者の孤立予防・軽減へ

・ 限界

- 地域性を反映した可能性
- 支援者とかかわりのある世帯が対象
- プログラム終了直後における変化のみの把握

・ 今後の課題

- 異なる地域での実施可能性と普及策の検討
- つながり・支援を一切拒否する世帯へのアプローチ方法の検討
- 中長期的な世帯の社会的脆弱性の変化の検討



ご清聴ありがとうございました

福定正城 k-fukus@n-fukushi.ac.jp